

AMCoR

Asahikawa Medical University Repository <http://amcor.asahikawa-med.ac.jp/>

看護研究集録(2019.7) 平成30年度:83.

先天性疾患によりストーマ造設し30年以上装具を使用せず経過していた
一症例

本間 美穂, 日野岡 蘭子

先天性疾患によりストーマ造設し30年以上装具を使用せず経過していた一症例

旭川医科大学病院 看護部 ○本間美穂 日野岡蘭子

【はじめに】今回、先天性疾患によりストーマを造設し30年以上装具を使用せず経過していた患者が装具使用に至るまでの経過を振り返ったので報告する。

【倫理的配慮】患者に学会発表の主旨を説明し口頭で同意を得た。

【症例】40代男性、既婚。直腸肛門奇形により他院でストーマ造設。閉鎖について詳細は不明だが成人期に至るまでストーマで経過している。就学前まで灌注排便法だったが管理困難があり就学以降ガーゼで管理し、自然と通院もしなくなった。ストーマ外来は知っていたが受診経験はなかった。職業は電気機器組み立工。臭気に対し誤魔化すためその場から離れる事や食事に気を使い生活していた。今回後天性腎盂尿管狭窄の手術目的で入院し、主治医よりストーマ全般の管理について依頼があり介入を開始した。

【経過】ストーマは左下腹部、腸骨稜に近接された位置にあり多量のチリ紙やタオルで管理し、今まで困った経験はなかった。ストーマケアの関心はあり、成人としての排泄マナーを念頭にオリエンテーションとケア指導を行った。患者と家族から「私たちは普通じゃなかった」と発言があり装具使用を試す事となった。当初目標を漏れない装具選択としたが、装具の密着感やストーマ袋の違和感が強く使用を続けられない可能性があり、より良い生活のための装具選択を目標とする事を患者と共有し、患者の希望を詳しく聞き装具選択した。退院時はガーゼ管理と装具使用の併用であったが、退院後は臭気や不意の排便に対し装具使用で安心感が得られることを実感でき装具使用となった。

【考察】皮膚・排泄ケア認定看護師は装具を使用せず生活していた患者を問題と捉え解決させたいと考えたが、本人は問題と捉えていなかった。それは幼児期にストーマであっても排泄に対する社会的規範についてストーマケアを通して知る機会がなかったためと考えられる。今回装具使用に至ったのは、排泄マナーを重視したオリエンテーションの実施と、今までの管理方法を否定せず本人が快適と実感できる装具検討を続けたためと考える。